

多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム
派遣研究報告書

2011 年 10 月 31 日

派遣者氏名（専門分野）	赤木 崇敏（東洋史学）
-------------	-------------

下記のとおり報告します。

記

研究テーマ	敦煌文献を用いた唐代文書行政システムの研究
-------	-----------------------

派遣期間

2011 年 7 月 22 日 ～ 2011 年 9 月 19 日

訪問研究機関	国	都市	訪問機関	受入研究者
	中華人民共和国	蘭州	甘肅省博物館・敦煌学研究所	馮培紅（蘭州大学敦煌学研究所）
	同上	敦煌	敦煌研究院・敦煌莫高窟・榆林窟・鎖陽城・肅北紫亭鎮遺址・陽関・南湖遺址	范泉（敦煌研究院）

派遣先で実施した研究内容

東部ユーラシアに多大な影響を及ぼした唐帝国が、その支配秩序を維持する装置として採用したのは、高度な官僚制と緻密な文書行政であった。特に後者、文書によって皇帝の意思を確実に帝国全土に通達し、また行政機構の各レベルの決定を迅速に關係機関に伝達するこの情報伝達システムは、唐のみならず中央集権的な体制を採る国家において人体における神経組織とも言うべき重要な存在である。この海外派遣では、帝国全土に張り巡らされた超広域の情報伝達ネットワーク、円滑に情報を伝達するための運用規定、さらにそれらを運営するための行政機構などの具体相の復元を目的とした。

唐が支配した中央アジア地域（東トルキスタン～河西回廊）からは 20 世紀初頭より膨大な数の唐代官文書が出土しており、文書行政を復元する上で、編纂史料からは窺えない情報を我々に提供する貴重な実例となっている。この唐代官文書は、中国や日本、ヨーロッパ各国の研究機関に分散・所蔵されており、現在では写真集の公刊やインターネットによる画像公開により容易に研究が進められる環境が整っている。しかし、中国各地に所蔵されるコレクションについては、史料集の出版や電子情報の公開はようやく緒に就いたばかりであり、公開されていたとしてもその図版は解像度の低いモノクロ写真ばかりであって、その全貌はいまだ明らかになっておらず、今回派遣地に中国を選んだ所以である。

今回の派遣プログラムでは、敦煌莫高窟より発見されたいわゆる敦煌文献を中心に、各地の研究機関に所蔵される唐代官文書の実見調査を、研究を進める上での大きな柱とした。また既に既出版の文書であっても、図版には写りにくい朱印・朱筆などについて正確な情報を得るために改めて原文書調査を行った。

裏面に続く

調査にあたっては、(1)唐代官文書の種類・書式・機能・伝達経路・情報内容・発信者と受信者の社会関係など各データを抽出し、次いで(2)行政機構の各レベルにてどのような情報伝達が図られたかを明らかにし、(3)それらを踏まえて情報伝達システムの再構築と、それを運用した行政機構の構造及び運用原理を解明するという方針を立てた。

もうひとつの柱は、文書中に現れる地名の比定や、各行政機関の位置関係、文書伝達の所用日数などを把握するため、中央アジア各地にある唐代官府の遺構や唐代駅道が走っていた主要幹線の景観調査を行うことである。当初予定していた敦煌周辺の唐代故城跡（沙州故城、瓜州鎖陽城、懸泉鎮跡、寿昌県城跡など）のほかに、甘粛・陝西地域から長安へ通ずるルートとその周辺遺址を重点的に調査した。

研究の当初の目的・計画の達成状況、明らかにできた成果

先行研究では、運用の基本原則である公式令を重視するあまり、唐初から五代に至るまで官文書はその形態や機能を変えることなく、公式令に記される規定が凡そ三世紀半に亘って遵守されたと一般に考えられがちであった。しかし、実際の行政の場においては、理念先行で形式的整合性を重視する公式令の規定が全時代を通じて遵守されていたわけではなく、公式令に規定されない書式や機能が七世紀という早い段階で確認しうる。そのうち機能的に弾力性に富む一部の書式は、時代が降るにつれて他の官文書の領域を浸食するなど使用される比重が高まり、官文書の体系は八世紀中期より大きく変化して宋代へと継承されていくと予想される。今回の派遣では、訪問したいいくつかの研究機関が移転・閉鎖していたために予定していた数量の文書調査を行えなかったが、それでも新史料を発見し、かかる見通しに対し有力な史料を蒐集することができた。また、各地で行った遺址・景観調査は、文書の背景を読み取る上で大きな収穫をもたらした。

派遣後の研究発表の予定

派遣期間に調査した唐代文書の分析結果については、本年12月に開催予定の中央アジア学フォーラム（代表：荒川正晴本学教授）で報告する。また『東洋学報』あるいは『内陸アジア史研究』などの査読付き雑誌に論文を公表し、その後『敦煌学輯刊』『敦煌研究』『敦煌吐魯番研究』などの学術雑誌にその中国語版を投稿する予定である。